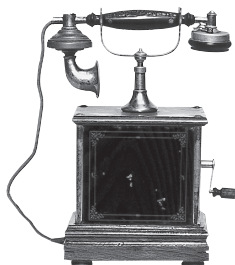


**デルビル磁石式  
甲号卓上電話機**

1897


**1897年(明治30年)**

明治30年12月、初めての卓上形電話機としてデルビル磁石式甲号、乙号の2種が登場した。

当時、電話機の発達にエポックを画したものといわれ、電話の実用価値を増すと同時に装飾品としても役立つようデザイン面にも細かい注意が払われている。

なお、付加使用料年額6円を要した。

甲号電話機には、当初のものと大正5年から登場した四角いきょう体の新形と2つの形態があり、写真は新形である。

**特徴**

送受話器は、デルビル壁掛形と同性能。甲号は送受話器を同一把手で連結してあるが、乙号は壁掛形と同様別々となっている。

いずれも発電機、誘導線輪及び磁石電鈴を同一の箱に納め、性能は同じである。

**\*同系機種**

デルビル磁石式乙号卓上電話機

**ソリッドバック磁石式  
壁掛電話機**

1899


**1899年(明治32年)**

明治32年2月、東京-大阪間の長距離電話回線の完成により、長距離通話用としてソリッドバック電話機が採用された。当時、長距離通話の利用者は、年額6円の付加使用料を支払い、長距離通話加入者となる必要があった。

開通当初、東京・大阪とも各178加入者でスタート。通話は近距離に劣らず良好であった。その後、神戸、京都等サービス対地も広がり、利用者も増大した。

**特徴**

ソリッドバック送話器は、炭素粒の前後に振動板を配して感度の上昇と雑音の排除を効果的にしている。

また、電池は、フォーラー電池を使って電圧を上げる等して電流を大きくしたので、長距離用に適した。

**グースネック共電式  
壁掛電話機**

1903


**1903年(明治36年)**

明治36年5月、初の英国製共電式交換機が京都局に導入され、同時に付随してグースネック共電式電話機が購入・採用された。

共電式は、利用者が受話器をとるだけで局を呼び出せるという便利な点のほか、電源を局内に集中してあるため、電話機障害が少なく、保守・交換作業が能率化され、また、発電機、電池が不要のため電話機の小型化・簡素化が図れる等の利点を持っている。反面、当初、湿気等が原因で起こる線路の絶縁低下による疑似信号の発生が問題とされた。このため、湿気の少ない京都局が最初の共電式局となった。

**特徴**

送話器にはソリッドバック送話器を、受話器には2本の棒状永久磁石を結合した双極形のものを使用した。

腕金の先端に送話器をつけた格好が“ガチョウの首”に似ているところから“グースネック”と呼ばれた。

**2号共電式  
壁掛電話機**

1909


**1909年(明治42年)**

京都に続いて明治42年、東京、大阪、名古屋の一部で共電式が採用された。この頃には共電式の欠点であった線路の絶縁低下の問題はエナメル線等の開発によって解決され、以後、大正期を通じ次々と共電式に改められていった。2号共電式電話機は、本格的な共電式時代を迎え国産化した最初の共電式電話機である。

**特徴**

送話器にはソリッドバック送話器を使用、受話器は有極電磁石を使った回路が採用されているほか、形態が簡素なものとなった。

**\*同系機種**

2号共電式卓上電話機

1920年	1924年	1942年	1944年	1946年
東京年額基本料 45円 東京、横浜、名古屋、大阪、京都、神戸の六大都市で市内通話料が度数制となる 度数料 2銭(市内通話1度毎)	度数料 3銭 (市内通話1度毎)	東京年額基本料 60円 度数料 5銭 (市内通話1度毎)	度数料 東京 10銭 (市内通話1度毎)	東京月額基本料 24円 度数料 20銭 (市内通話1度毎)
			東京～大阪間3分毎に2円	東京～大阪間3分毎に7円50銭